



# スピーキング・ テストをどう作る

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

## 1. レポートリーの少ないスピーキング・テスト

今回は、スピーキング・テストの作成・実施について取り上げる。テストは、教師が学習者であったときに受けてきたものを模倣して作っていることが多く、必ずしもテスト理論の講義や作成のトレーニングを受けて作っているわけではない。ところが、スピーキング・テストの場合特にやっかいなのは、他の技能に比して、教師自身があまりスピーキング・テストを受けた経験がないということである。

そこで本稿では、いくつかのスピーキング・テストを紹介し、その根底にあるスピーキング力の考え方について述べてみたい。

## 2. スピーキング力をどう測るか

スピーキングという技能は、発表技能である。このことは、この技能が外から観察可能だということの意味する。それゆえ、その能力を測ることは、一見単純なことのように思われる。話す能力を測りたいのだから、話させればいい。確かにそうなのだが、何を話させるのか、どのように話させるのか、誰と話させるのかなど、様々な要素があり、考えればきりが無い。

ここでは、スピーキング力の測り方を大きく2つに分けてみる。1つは、実際のコミュニケーション場面で行うであろうタスクをテストで生徒に課すものである。もう1つは、様々なスピーキング活動に共通する潜在能力を見ようとするものである。

### 2.1. 実際のコミュニケーション場面に基づくテスト

スピーキング・テストにおいて、実際のコミュニケーション場面に基づくテストといった場合、本人が「自分のまま」で受けられるテストと、「誰かの

役割」を演じたり「どこかの場所」を想定したりして受けなければならないテストとがある。多くの場合、インタビュー・テストでは、面接官から尋ねられた自分のことに関して、自分のまま（誰か別人の役割を演じることなく）答えることになる。「名前」や「住んでいるところ」、「好きなスポーツ」などを尋ねられたりしている。これらの質問には、すべて「自分についての事実」を答えることになると思われるが、そのクラスの担当教師が面接官をする場合は、教師の側がすでに答えを知ってしまっている質問 (display question) になってしまい、本当の意味での情報のやりとりが行われていないことがあるので、注意が必要である。

同じインタビューでも、2つの異なる絵を使って、生徒にそのうちの1つを描写させ、相違点を探させるという方法もある。この場合、教師の持っている絵と生徒の持っている絵は異なっているので、そこに information gap が存在しており、コミュニケーションの必然性が生じることになる。また、複数の連続した絵を用意すれば、ストーリー・テリングとなる。1枚の絵を描写するのと、複数の連続した絵を描写するのでは、測れる能力が異なってくるので、本来どのような能力を測ろうとしていたのかの確認が必要である。

教師によるインタビュー・テストでは、教師だけが質問を行うことになってしまうが、生徒どうし (2人または3人) による形も可能である。生徒どうしであれば、生徒も質問役に回ることができる。

### 2.2. 虚構の世界を使って：ロール・プレイ

これに対して、ロール・プレイという手法がある。これは、ある場面を設定して、その場面における役割を受験者に与え、そこでの課題を遂行させるとい

うものだ。例えば、生徒には次のようなロール・プレイング・カードが渡される。この場合、教師は店員の役をやることになる。

**ロール・プレイング・カード (例)**

あなたは今、買い物をしてしています。  
熊の置物が気に入ったので、値段を聞いて、  
3,000 円以下だったら買しましょう。

こうしたタスクでは、決められたシナリオがあるわけではないので、課題遂行のためにどのように話しかを受験者が自分で考えていかなければならない。既成の会話を2人の生徒に割り振って暗唱させるようなものもロール・プレイと呼ぶことがあるが、それは厳密には本来のロール・プレイではない。

SST (Standard Speaking Test)\* などにおけるロール・プレイは即興でやることになるが、中学生を対象とするテストでは、授業でやったことが身につければ遂行可能なものにすべきだろう。また、生徒に課すタスクも現実の生活で彼らがやっているようなタスク(必ずしも「英語」でやっていなくてもよいだろう)が望ましい。

### 2.3. スピーキングの根底にある能力の測定

これまでに述べたようなスピーキング・テストは、現実の生活で見ることのできるパフォーマンスを再現しようとしている。これに対して、このような無数のパフォーマンス事例を追求することをせずに、あらゆるパフォーマンスの根底にある能力を測ろうとする方法もある。これらの中には、文復唱テスト(sentence repetition test) や口頭並べ替えテストなどがある。以下、それぞれを簡単に紹介する。

まず、文復唱テストは、その名の通り、言われた文をそのままくり返すテストである。作業自体は、教室でもやっている活動であるが、どのような文が言われるかわからない状態で、文を聞き取って、一時的に保持した上で再生するという作業は、予想以上に困難なものである。テスト項目の困難度は、主に文の長さや文構造の複雑さで決まってくる。次の例で言えば、例3のほうが例1より長い文なので困難度が高く、例2のほうが受動態の文であるだけ、例1よりは困難度が高いと想定される。

**例 1**

cue: My sister was reading a book. (6語)  
answer: My sister was reading a book.

**例 2**

cue: The car was cleaned last Sunday.  
(6語)  
answer: The car was cleaned last Sunday.

**例 3**

cue: When I came home, my sister was reading a book. (10語)  
answer: When I came home, my sister was reading a book.

次に、口頭並べ替え問題であるが、これは1つの文をいくつかの単位にバラして、それらを音声で流す。受験者はそれらを聞き取って並べ替え、元の正しい語順の文にするというものである。

cue: than yours ... is longer ... my pencil  
answer: My pencil is longer than yours.

これらの手法は、作成や実施が比較的容易で、LLなどで一斉に行うこともできるので、実用性が高い。また、1問ずつの実施時間が短いので、多くの問題数を確保することができる。ただし、これらのテストで高得点を取ることが、実際のスピーキングにおいてどのような能力を保証するのかは明確でない。例えば、受動態の文を繰り返して言えることや正しく並べ替えて言えることが、受動態の文を必要ときに自分で言える能力と、どの程度関連しているのかわからない。こうした点については、今後更なる研究が必要であろう。

スピーキング・テストは、まだまだ未知の分野である。しかしながら、どのような形にせよ、やってみることに意味がある。また、上記以外に、スピーチやプレゼンテーションによるテストなどもあるが、これらについてはまた別の機会に扱うことにする。

\* 15分間の対面インタビューをもとに、総合的な会話能力を段階で判定するテスト。